

A.Burkhardt の発話行為理論 : 終わりの始まり ?

著者	丸井 一郎, 西嶋 義憲
雑誌名	愛媛大学教養部紀要
巻	24
号	3
ページ	69-79
発行年	1991-01-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/9896

A. Burkhardt の発話行為理論

—— 終わりの始まり？ ——

丸 井 一 郎・西 嶋 義 憲

- 0. はじめに
- 1. A. Burkhardt の発話行為理論
 - 1. 1. 発話行為研究の先駆者としての A. Reinach : 社会行為
 - 1. 2. 従来の発話行為理論への批判 — 存在論的誤謬
 - 1. 3. 発話行為研究の意味論化 : 意味論的転換
 - 1. 4. 間接発話行為
 - 1. 5. 発話行為研究における Burkhardt の理論の意義
- 2. Burkhardt(1986) に対する書評
 - 2. 1. Hermanns(1990) の場合
 - 2. 2. Motsch(1990) の場合
- 3. 発話行為理論のゆくえ
 - 3. 1. 問題点
 - 3. 2. 個別文化ごとの違い : ドイツ語遂行動詞と日本語の対応表現との比較
 - 3. 3. 個別の言語行為研究
- 4. おわりに : 終わりの始まり
- 5. 注
- 6. 文献

Zusammenfassung

Anhang

0. はじめに

本稿ではまず、Burkhardt(1986) の発話行為理論 (Sprechaktttheorie)¹⁾ を簡単に紹介し、その書評も検討する。次に、この議論に基づいて、言語行為研究としての発話行為理論の問題点および可能性を明らかにする。さらに、ドイツ語の遂行動詞 (performative Verben) とそれに対応する日本語表現とを比較することにより、個別言語研究における発話行為概念の有効性を問う。

1. A. Burkhardt の発話行為理論

1. 1. 発話行為研究の先駆者としての A. Reinach : 社会行為

Burkhardt によれば, Adolf Reinach は, Austin (1962) より約50年も前に法哲学の分野で言語の行為的側面を社会行為 (soziale Akte) という用語を用いて分析したという (Burkhardt : 1986 : 16)。現在発話行為として研究されている言語の行為的側面を社会行為という概念で研究していたとするなら, 言語学は, Reinach の先駆的業績を正当に評価していなかったことになる。Burkhardt は主張する。

社会行為は, Burkhardt の説明によると, 話者と聞き手との間に, 権利 (Ansprüche) と拘束性 (Verbindlichkeiten) を生じさせるという (Burkhardt : 1986 : 18ff.)。例えば, 「質問 (Frage)」という行為では, 話者が聞き手に対して「答え (Antwort)」を要求する権利が, 他方聞き手には答えを与える拘束性が生じる。しかも, そのような社会行為による会話参与者間の関係づけは, 発話行為と違って慣習 (Konvention) によるのではなく, アプリオリ (a priori) に決まっていると規定されている (Burkhardt : 1986 : 62ff.)。

1. 2. 従来の発話行為理論への批判 - 存在論的誤謬

Burkhardt は, Reinach の社会行為の発想に基づいて, Austin (1962), Searle (1969) などに代表される従来の発話行為理論への批判として, 1) 聞き手の立場の軽視と 2) 存在論的誤謬 (ontologischer Fehlschluß) の2点を指摘する (Burkhardt : 1986 : 前者 3. 1.; 3. 2., 後者 3. 3., S. 157ff.)。前者は, 従来の研究がモノローグ指向・単一文指向・発話者指向であり, したがって聞き手の立場が軽視されていたという批判である。後者は, 発話を構成する言語表現自体に, 発話内行為 (Illokution) の対応物の存在を認めるという考え方に対する疑問である。たとえば, 疑問文には, 「疑問」という発話内行為が内在する／対応しているとみなすことは, その例である。つまり, 発話内の力表示形式 (illocutionary force indicating devices : ifids) を言語表現内に認める発想である。そもそもこのような考え方が提出されていたから, 直接発話行為 (direkte Sprechakte) と間接発話行為 (indirekte Sprechakte) とを区別する立場が出てきたのである。

1. 3. 発話行為研究の意味論化 : 意味論的転換

従来の理論における聞き手の立場の軽視と存在論的誤謬という, 上述の2つの問題点を克服するために Burkhardt は, 発話内行為は, 話者の立場から規定されるのではなく, むしろ聞き手による発話の解釈過程を通じて規定されると定義する (Burkhardt : 1986 : 159ff.)。その発想によると, 発話内行為の成立, つまり, 話者の「発話」行為が, 話者と聞き手との間の行為として成立するのは, 次のような場合であるという。発話の意味論的情報・コンテキスト情報が, ある特定の遂行動詞／遂行表現の意味論的メルクマールの束からなるカテゴリーと一致すれば, その発話は, 当該行為タイプの実現と解釈していい, という聞き手による発話の意味論的カテゴリーへのメタ言語的分類が, Burkhardt の考える発話行為の意味論的規定である。その際必要となるのは, 遂行動詞／遂行表現による発話内行為の意味論的カテゴリー化である。これは, 成分分析 (Komponentenanalyse) を利用し, 意味素性を抽出するという, いわゆる語場 (Wortfeld) の分析によってなされる (Burkhardt : 1986 : 315ff.)。したがって,

この発想に立てば、発話行為研究の基本的な課題は、遂行動詞／遂行表現の意味論的分析によるカテゴリーの設定ということになる。これを Burkhardt は、発話行為研究の意味論的転回 (semantische Wende) と呼ぶ (Burkhardt : 1986 : 352ff.)。

1. 4. 間接発話行為

従来言語学において、発話行為研究は、實用論のレベルに属する現象として研究されてきたが、上のように意味論の分野に属するものとして捉えなおすとすると、いわゆる間接発話行為の問題はどうなるであろうか。この点に関して、Burkhardt は、次のような明確な定義を与えている：

Def. : Ein indirekter Sprechakt liegt immer dann vor, wenn ein Sprecher einem Hörer – unter Umgehung der die betreffende Illokution bezeichnenden performativen Formel – das Bestehen der Voraussetzungsbedingungen und typischen semantischen Merkmale einer performativen Formel mit Hilfe sprachlicher, extralinguistischer oder kontextueller Mittel zu verstehen gibt, so daß der Hörer in der Lage ist, die betreffende Äußerung aufgrund ihrer sprachlich-semantischen sowie ko- und kontextuellen Merkmale als Vorkommen eines Sprechakts eines bestimmten, in metasprachliche Kategorien gefaßten und so faßbaren konventionellen Typs zu klassifizieren. (Burkhardt : 1986 : 356-7)

すなわち、話者は、聞き手に対して遂行表現のもつ前提条件や意味論的情報を言語的／非言語的／コンテクスト的手段を用いて理解させるようにすると、聞き手は、そういった情報をもとに、話者の発話を発話内行為に関する意味論的カテゴリーにメタ言語的に分類する。したがって、この規定のもとで重要なのは、誤って表現あるいはその発話自体がもっているとされる発話内の力指示形式 (ifids) ではなく、聞き手の解釈／行為カテゴリーへの分類が決め手となる。言語表現の ifids の出力を評価しないので、直接発話行為は存在せず、現実にはほとんどが間接的となる。²¹

1. 5. Burkhardt の理論の意義

ここでは、発話行為研究の意味論化と間接発話行為問題の解消という2点を取り上げる。

まず、遂行動詞／遂行表現の意味論的分析による発話行為カテゴリーの設定という、言語行為論の意味論的研究に道を開いたという点である。具体的な研究課題としては、遂行動詞／遂行表現の語場分析である。これが、本来言語学が扱う、言語の行為的側面であろう。しかし、この研究は、個別言語的に行なわれる必要があるだろう。つまり、この Burkhardt の研究の前提として、言語レベルでの遂行動詞の分析によって明らかにされる行為概念と、実際のコミュニケーション上の行為概念との間に一定の対応関係が想定されている。ところが、以下で明らかにされるように (3. 2.), 日本語には、それほど単純な対応関係は認められない。つまり、言語レベルの行為分析がすなわち、実際の行為概念の分析になるとは限らないということもあるのである。

次に、発話行為理論における間接発話行為の問題を解消させた点であるが、上で見たように、

発話内行為の成立は、ifidsに基づかず、カテゴリー分類という解釈過程によると規定した。こうして、ifidsと発話内行為との対応関係を研究する時代は、終わりを宣告されたのである。そもそも間接性という現象は、表現レベルではありうるが、行為レベルではありえない。つまり、行為を認定するための言語表現と行為カテゴリーとの間のずれを間接性ということは可能である。

2. Burkhardt (1986) に対する書評³¹

書評で議論されているすべての点について言及することはできないので、言語研究における発話行為研究の意義に関連する範囲内にとどめる。

2. 1. Hermanns(1990) の場合

Hermanns(1990)の主張は次のとおり。上で例示したように、Reinachは、たとえば、質問という行為について、話者には答えを要求する権利が、聞き手には答えを与える拘束性が生じると主張するが、これはおかしいと言わざるを得ない。質問して答えが得られたら、話し手は、むしろ感謝しなければならないくらいだというのがその理由である。たとえば、どんな質問に対しても、あるいはどんな依頼に対しても、それに従わなければならないとすれば、驚きである。したがって、特別の条件がそろっているなら別だが、すべての発話行為が *Ansprüche / Verbindlichkeiten* を作り出すと考えることは間違っている。とするなら、これまでの発話行為研究で、たとえば *Befehl* は、*Verbindlichkeit* と結びつけられるのが自明のこととされてきたが、これは修正されてしかるべきである、というのである (Hermanns : 1990 : 54)。なお、この点については、3. 3. を参照。

2. 2. Motsch (1990) の場合

Burkhardtによる、上述の従来の発話行為理論に対する批判点のうち、たとえば、単一文指向という問題に関しては、そもそも発話行為研究では、発話内行為が文法単位にどのように写像されるかその規則が問題となるので、単一文指向でもかまわないとMotschは主張する (Motsch : 1990 : 57f.)。すなわち、Motschの考えは、発話内行為と言語表現との対応／写像関係を規則として確定しようとしていると言える。

これは、Burkhardtが批判する存在論的誤謬と言える (Burkhardt : 1990 : 73ff.)。つまり、言語表現と発話内行為との間に一定の関係を見いだそうとしているからである。そういう意味で、Motschの議論は、ここで立ち入る必要はない。

3. 発話行為理論のゆくえ

3. 1. 問題点

発話行為研究上の問題点は、多岐にわたり、さまざまであろうが (vgl. Meibauer : 1985), ここでは、経験的／個別的言語行為研究における発話行為概念の有効性という問題に限定する。関心はつまり、発話内行為という概念および個々の遂行動詞のカテゴリーは、たとえば、個別言語の行為研究において有益なのかどうかという点にある。その際の基本的な問いは、発話行

為研究は、経験的な言語研究になじまないのではないかという疑問である。

Heeschen(1980)は、遂行動詞は、民族言語学(Ethnolinguistik)の立場からすれば、ヨーロッパ言語の特殊例であり、多くの言語に欠けていると主張している(S. 264)。そこで、ドイツ語と日本語に関する遂行表現の比較という作業を通じて、上記の疑問に答えを与えてみたい。

3. 2. 個別文化ごとの違い：ドイツ語遂行動詞と日本語の対応表現との比較

Anhang に表1と表2を掲げてある。表1は、Burkhardt(1986)に挙げられている遂行表現とその日本語対応表現である。日本語表現は、それぞれのドイツ語遂行表現について、動詞／Modal表現／ルティーン表現の3つの可能性をあげてある。表2は、Austin(1962)に掲げてある英語の明示的遂行動詞とその日本語訳、日本語対応表現、ドイツ語対応表現である。⁴⁾

表1の[ASSERTIVE]に分類されている“behaupten”を例に取り上げて考えてみよう。このドイツ語動詞は、いわゆる遂行動詞として“Ich behaupte, daß p.”という形式で使用可能である。ところが、その動詞の日本語対応表現「主張する」、「言い張る」は、たとえば「～と主張する」、「～と言い張る」という形式では、書き言葉ではあるいは可能かもしれないが、少なくとも日常の話し言葉では、遂行表現として(performativ)使用することは不可能である。たとえば、「彼は東京出身だと主張します」という表現は、日常的には遂行表現としては使用できない。つまり、その場合、遂行表現ではなく、自己の発言に対するメタ言語的な命名といった説明表現となってしまう。日本語の遂行動詞には、遂行的側面と説明的側面があるが、表1に挙げてあるドイツ語遂行表現に対応する日本語表現のほとんどは、日常表現としては遂行的に使用することはできず、単に説明として使われるだけのようである。したがって、この議論が正しいとするなら、日本語の遂行動詞／遂行表現を分析する作業は、メタ言語的な記述としての説明表現あるいはテクニカル・タームとしての動詞の分析になってしまうので、言語行為の分析という目的にとっては、有益であるとは言い難い。

もちろんだからといって、“behaupten”に相当する発話行為概念／発話行為カテゴリーが日本語にないということの意味しない。たとえば、「主張」という行為は、しばしば、「～なのだ」といった表現で実現されることが多く、⁵⁾メタ言語的／メタコミュニケーション的な言い換えの表現も「強く言う」といったものである。制度的な負荷のある「主張」といった表現を、分析概念に転用することはできるが、通常(日常言語)の語彙には、いずれにせよ、当該の表現が乏しい。⁶⁾

上の例は、さらに他の動詞についても言える(表1、表2を参照)。遂行表現に対応する日本語を少し詳しく調べてみると、一語で表現する動詞が少ないことがわかる。たとえば、「忠告する」、「脅迫する」といった、いわゆるサ変動詞か、あるいは、「言い張る」、「請け合う」といった複合動詞がほとんどで、「断る」「許す」といった一語表現(和語)はあまりない。また、「助言する」という行為を遂行レベルではなく、記述レベルで言う場合でも、日常では「～したほうが良いと言っている」というように表現し、「～と助言している」ということは少ない。つまり、コミュニケーション上の行為カテゴリーを命名する表現が本来の日本語には少ないということである。いわゆるサ変動詞は、明治期に、外国語の翻訳を通して導入されたものが多い。歴史的には、おそらく遂行動詞は、全くなかったか、あっても少数だったと考えられる。少なくとも現代日本語には、少ないと言っている。むしろ、「～と言う」形が多い

ようである。⁷⁾つまり、メタコミュニケーション的カテゴリー化が進んでいない。何か文化的な背景があることが予想されるが、ここでの論を越えるので、立ち入らない。

3. 3. 個別の言語行為研究

日本語では、新造のテクニカル・ターム（説明表現）をのぞくと、遂行動詞が少ない。Heeschenによれば、ヨーロッパ諸言語の遂行動詞は、例外的と考えるべきらしいが（Heeschen：1980：264）、たとえば中国語など、他にも遂行動詞の多い言語が存在する。いずれにせよ、Burkhardtの考えた発話行為の意味論的転回も部分的なものにとどまらざるをえない。発話行為は、話者と聞き手との協調的努力で成立するという（Burkhardt：1987：198）。これは、すでに見たように聞き手の解釈を重視していることを意味する。表現に内在するのではなく、話者と聞き手が持っている行為概念と、それに対応する表現にあたるものがあるか否かが、直接発話行為と間接発話行為の区別になる。Burkhardtは、個別言語的メタ言語的カテゴリーに対応する遂行表現を分析することによる発話行為の意味論を提出した。しかし、上で見たように、遂行表現が乏しい言語もある。つまり、発話行為概念は、そのような言語にも適用可能であるような抽象的分析の概念としては考えられる。だが、すると、Burkhardtが考えるような、経験的に解明できる一言語の意味論ではなくなる。では、発話行為概念とその言語表現を切り離せばいいのか。それは、行為の超言語的あるいは経験超越的論理構造の追究になってしまうので、たとえば哲学といった別の研究分野を形成する（vgl. 土屋：1980）。いずれにせよ、個別社会文化歴史的背景上の具体的な言語行為の経験的研究とは適合しにくいと言える。

また、発話行為研究では、Burkhardtの研究でもそうだが、発話行為と権利・拘束性との関連が議論されることがあるが、果してこの議論は正しいのか。つまり、権利や拘束性は、発話行為カテゴリーから生じるのか、あるいは、相互行為という出来事自体から生じるのか。

権利や拘束性は、個別文化ごとに違っている可能性がある。しかも、発話行為概念は、単一の目的へと抽象化されているから、目的関連が複合した個別文化的な現象を論じることは困難である。たとえば、「質問」という行為について言えば、たしかに、その目的は、発話行為という抽象レベルでは、質問者が知らない情報を、知っていると期待される聞き手に要求することである。しかし、質問行為は、実際のコミュニケーションの場では異なる役割を演じる。ドイツでの実際のコミュニケーションの場では、拘束性が聞き手側だけに生じるとは考えにくい。つまり、「質問」という行為を遂行している話者の方にむしろ、相手に対して質問行為を行なう「理由づけ」が必要となろう。他方、日本では、知っていることを尋ねることがよく行なわれる。⁸⁾つまり、言語行為は、個別文化ごとにそのステイタスが異なる。⁹⁾とするなら、発話行為という抽象的な概念ですぐいとれる実際のコミュニケーション上の行為はどの程度あるのかが疑問視されている。

4. おわりに：終わりの始まり

Burkhardt自身、自分の発話行為研究（1986）に対する理解に変化が生じてきていると述べている。すなわち、まず執筆当時は、発話行為理論的アプローチの修正／改良を目指していたつもりだったが、現在では、発話行為理論をくつがえす作業であったと理解が変化し、この

研究は、発話行為理論の終わりの始まりを告げる試みであったと評価を改めているのである (Burkhardt : 1990a : 65)。

Burkhardt による従来の発話行為理論への批判に対して説得的反論がない限り、また彼の代案が部分的である限り、言語行為一般に対する注目を喚起し、言語に対する視野を拡大する上で大きな役割を果たした発話行為理論は、一応の帰結に達したと言えるだろう。個別文化とかわりのない言語哲学なら、英語やドイツ語といった個別言語を参照して設定された抽象的カテゴリーである発話行為概念は、有効かもしれない。しかし、現実のさまざまな要因が影響しあう出来事としてのコミュニケーションの場では、発話行為概念は有効ではなからう。

結局、たとえば、Ehlich (1991) といった、個別社会文化的歴史的要因を経験的に取り扱う言語行為理論が必要なのである。

5. 注

- 1) Burkhardt (1986) だけでなく、これをコンパクトにまとめた Burkhardt (1987 ; 1990b) も参照している。なお、Burkhardt (1986) は、第一回 Hugo Moser 賞を受けている。
- 2) Heeschen (1980) によれば、特別に説明すべきは「間接発話行為」ではなく、むしろ「直接発話行為」だという (S. 265)。
- 3) 書評としては、Hermanns (1990), Motsch (1990), Panther (1990) がある。
- 4) 表2の日本語訳は、J. L. オースティン著『言語と行為』(坂本百大訳)、大修館、1978による。また、表2のドイツ語対応表現については、Rudolf Reinelt 氏のお世話になった。記してお礼申し上げる。
- 5) たとえば、「彼は東京出身だ」といったように助動詞を用いて表現することが多い。
- 6) ドイツ語は逆に、文末に現われる Partikeln が少ない。
- 7) 日本語の他に、朝鮮・韓国語やタイ語も「～と言う」形が多い。この指摘は、Rudolf Reinelt 氏から受けた。お礼申し上げる。
- 8) これは、尋ねられた知識部分が共通知識 (common knowledge) から共有知識 (shared knowledge) に引き上げられているかどうかをきいているだけである (vgl. Kreckel : 1981 : 25ff.)。
- 9) 言語行為の生態論的研究については、Hermanns (1987) および丸井 (1992) を参照のこと。

6. 文献

- Austin, John L. : *How to do things with words*. Cambridge / Mass. : Harvard UP, 1981 (1962). (Dt. Übersetzung : *Zur Theorie der Sprechakte*, Stuttgart : Reclam, 1979)
- Burkhardt, Armin : *Soziale Akte, Sprechakte und Textillokutionen. A. Reinachs Rechtsphilosophie und die moderne Linguistik*. Tübingen : Niemeyer, 1986.
- derselbe : Der Sprechakt als kooperative Anstrengung. Adolf Reinachs Phänomenologie der “sozialen Akte”, Kritik an der Sprechakttheorie und ein hörerseitiges Schlußfolgerungsmodell. In : Liedtke, Frank / Rudi Keller (Hg.) : *Kommunikation und Kooperation*. Tübingen : Niemeyer, 1987, 185–215.
- derselbe : Les jeux sont faits. Eine Erwi(e)derung an Fritz Hermanns und Wolfgang Motsch. In : ZGL 18, 1990a, 65–80.
- derselbe : Speech act theory – the decline of a paradigm. In : derselbe (ed.) : *Speech Acts, Meaning and Intentions*. Berlin / New York : de Gruyter, 1990b, 91–128.
- Ehlich, Konrad : Funktional-pragmatische Kommunikationsanalyse. Ziele und Verfahren. In : D. Flader

(Hrsg.) : *Verbale Interaktion. Studien zur Empirie und Methodologie der Pragmatik*. Stuttgart : Metzler, 1991, 128–143.

– Heeschen, Volker : Theorie des sprachlichen Handelns. In : Althaus, H. P. / Henne, H. / Wiegand, H. E. (Hrsg.) : *LGL (Lexikon der Germanistischen Linguistik)*. Tübingen : Niemeyer, 1980, 259–267.

– Hermanns, Fritz : Handeln ohne Zweck. Zur Definition linguistischer Handlungsbegriffe. In : Liedtke, Franck / Rudi Keller (Hg.) : *Kommunikation und Kooperation*. Tübingen : Niemeyer, 1987, 71–105.

– derselbe : Innere Akte. Zu einer Neubegründung der Sprechakttheorie aus dem Geist der Phänomenologie. In : *ZGL* 18, 1990, 43–55.

– Kreckel, M. : *Communicative acts and shared knowledge in natural discourse*. New York : Academic Press, 1981.

– Meibauer, Jörg : Sprechakttheorie : Probleme und Entwicklungen in der neueren Forschung. In : *Deutsche Sprache*, 1985, 32–72.

– 丸井一郎 : 「談話の相互行為的基盤と『協調』の概念」 . In : 『ドイツ文学』 Nr. 88, 1992 (印刷中).

– Motsch, Wolfgang : Was erwarten Linguisten von einer revidierten Sprechakttheorie ? . In : *ZGL* 18, 1990, 53–64.

– Panther, Klaus-Uwe : Review. In : *Journal of Pragmatics* 14 (5), 1990, 817–823.

– Searle, John R. : *Speech acts. An essay in the philosophy of language*. Cambridge : Cambridge UP, 1977 (1969).

– 土屋 俊 : 「言語行為論の展開 – 『間接的言語行為』という話題をめぐる –」 . In : 『言語』 Vol. 9, No. 12, 1980, 32–40.

Zusammenfassung

Gibt es eine Sprechakttheorie nach A. Burkhardt ?

Das Ziel der vorliegenden Arbeit liegt darin, Burkhardts Kritik an der Sprechakttheorie und seinen Weiterentwicklungsansatz danach darzustellen. Darüber hinaus ergeben sich Probleme mit dem Begriff Sprechakt, genauer gesagt Illokution, aufgrund eines Vergleichs zwischen deutschen performativen Formeln und den fast nur aus chinesischen Lehnwendungen bestehenden entsprechenden japanischen Ausdrücken. Der Begriff der Illokution, der bei der Erforschung von Handlungsaspekten der Sprache eine große Rolle gespielt hatte, erweist sich als zu abstrakt für die Einzelsprachenforschung. Nach diesem “Ende” der Sprechakttheorie sind empirische Untersuchungen zu einzelsprachlichen gesellschaftlichen und historischen Faktoren nötig.

※平成 3 年 9 月 20 日受理

Anhang

表1: Burkhardt(1986)の述行表現例と日本語の対応表現

<p style="text-align: center;">[ASSERTIVE]</p> <p>-behaupten 1) Verb: 「主張する」, 「言い張る」 2) Modal表現: 「～だ」, 「～である」, 「～なのだ」 3) Routine: ?</p> <p>-beschreiben 1) Verb: 「描写する」, 「ありありと述べる」, 「詳しく述べる」 2) Modal表現: ? 3) Routine: ?</p> <p>-vorheransagen 1) Verb: 「予想する」, 「予想する」, 「予想を述べる」, 「予想を言う」 2) Modal表現: 「～だろう」, 「～でしょう」 3) Routine: ?</p> <p>-klassifizieren 1) Verb: 「分類する」, 「区分する」 2) Modal表現: ? 3) Routine: ?</p> <p>-antworten 1) Verb: 「答える」, 「返答する」, 「返答をする」 2) Modal表現: ? 3) Routine: 「お答えします」</p>	<p>3) Routine: ?</p> <p>-schwören 1) Verb: 「開う」, 「開約する」, 「かたかく約する」 2) Modal表現: 「必ず～します」 3) Routine: ?</p> <p>-versagen 1) Verb: 「承諾する」, 「承諾の過事をする」 2) Modal表現: 「～しましょう」, 「～しよう」 3) Routine: 「いいでしょう」, 「よろしい」</p> <p>-akzeptieren 1) Verb: 「認める」, 「承諾する」, 「受け入れる」 2) Modal表現: ? 3) Routine: 「認めましょう」, 「いいでしょう」, 「よろしい」, 「わかりました」</p> <p>-garantieren 1) Verb: 「保証する」, 「請け合う」 2) Modal表現: ? 3) Routine: 「絶対に大丈夫(です)」</p>
<p style="text-align: center;">[DIREKTIVE]</p> <p>-bitten 1) Verb: 「頼む」, 「お願いする」, 「請い求める」 2) Modal表現: 「～してください」 3) Routine: ?</p> <p>-befehlen 1) Verb: 「命じる」, 「命令する」, 「指図する」 2) Modal表現: 「～しろ」, 「～しなさい」 3) Routine: ?</p> <p>-erlauben 1) Verb: 「許す」, 「許可する」 2) Modal表現: 「～していい」, 「～してもかまわない」 3) Routine: 「よろしい」, 「許す」</p> <p>-verbieten 1) Verb: 「禁じる」, 「禁止する」, 「許さない」, 「禁止止める」 2) Modal表現: 「～するな」, 「～してはいけない」 3) Routine: 「いけない」, 「だめ」</p> <p>-raten 1) Verb: 「助言する」, 「助める」 2) Modal表現: 「～したほうがいい」, 「～するといい」 3) Routine: ?</p> <p>-ankündigen 1) Verb: 「予告する」, 「知らせる」, 「告げる」, 「通告する」 2) Modal表現: ? 3) Routine: 「お知らせいたします」, 「ご連絡いたします」</p> <p>-warnen 1) Verb: 「警告する」, 「用心させる」, 「切に助める」 2) Modal表現: 「～しないほうがいい」, 「～すると危ない」 3) Routine: 「用心しなさい」, 「気をつけなさい」, 「注意しなさい」</p> <p>-fragen 1) Verb: 「尋ねる」, 「きく」, 「質問する」, 「開う」 2) Modal表現: 「～ですか？」 3) Routine: 「お尋ねします」</p>	<p style="text-align: center;">[EXPRESSIVE]</p> <p>-entschuldigung 1) Verb: 「弁解する」, 「詫げる」, 「謝る」, 「言い訳をする」, 「申し訳を言う」 2) Modal表現: ? 3) Routine: 「すみません」, 「ごめんなさい」, 「申し訳ありません」</p> <p>-gratulieren 1) Verb: 「祝う」, 「お祝いを言う」, 「祝辞を送る」 2) Modal表現: ? 3) Routine: 「おめでとう」, 「おめでとございます」</p> <p>-danken 1) Verb: 「感謝する」, 「ありがとうを言う」, 「お礼を言う」 2) Modal表現: ? 3) Routine: 「ありがとう」, 「すいません」</p> <p>-loben 1) Verb: 「ほめる」 2) Modal表現: ? 3) Routine: 「すばらしい!」, 「よくできました」, 「よくがんばりました」</p> <p>-tadeln 1) Verb: 「とがめる」, 「責める」, 「叱る」, 「非難する」 2) Modal表現: ? 3) Routine: 「こら!」</p> <p>-vorwerfen 1) Verb: 「とがめる」, 「責める」, 「非難する」, 「叱責する」 2) Modal表現: ? 3) Routine: 「どういことなんだ」, 「だめだ!」</p>
<p style="text-align: center;">[KOMMISSIVE]</p> <p>-versprechen 1) Verb: 「約束する」, 「開う」 2) Modal表現: 「(きつと)～します」, 「～するつもりです」 3) Routine: ?</p> <p>-drohen 1) Verb: 「脅す」 2) Modal表現: 「～するぞ」</p>	<p style="text-align: center;">[DEKLARATIONEN]</p> <p>-entlassen 1) Verb: 「解雇する」, 「替にする」, 「ひきをやる」 2) Modal表現: ? 3) Routine: 「首だ」</p> <p>-den Krieg erklären 1) Verb: 「宣戦を布告する」, 「宣戦布告をする」 2) Modal表現: ? 3) Routine: ?</p> <p>-verurteilen 1) Verb: 「判決を下す」, 「申し渡す」 2) Modal表現: ? 3) Routine: ?</p> <p>-vom Platz stellen 1) Verb: 「退場を告げる」 2) Modal表現: ? 3) Routine: 「退場!」</p> <p>-ernennen 1) Verb: 「任命する」, 「指名する」, 「定める」, 「任ずる」 2) Modal表現: ? 3) Routine: ?</p>

表2: 英語行動動詞 (カテゴリー) の比較

Original [英語] (「和訳」)	日本語	ドイツ語
[VERBIDINGIVES]		
acquit 「無罪とする」	無罪とする, 無罪を言い渡す	freisprechen, sich bewahren
convict 「有罪と宣告する」	有罪と宣告する	schnellig sprechen
find (as a matter of fact) 「(事実として) 認定する」	有罪の判決をくだす	verurteilen
hold (as a matter of law) 「(法的な事項として) 判定する」	判定する, 判定する, 評議する	(als etw.) bewerten
interpret as 「と解釈する」	判定する, 判定する, とる	für Recht halten
understand 「と理解する」	と解釈する, 理解する, とる	auslegen, interpretieren
read it as 「と解する」	と解する, と解する, と読む	ich fasse es so auf,
rule 「規定する」	規定する, 決める	verstehen
calculate 「判定する」	判定する	(so und so) lesen
reckon 「判定する」	判定する, 判定する	(als etw.) bestimmen
estimate 「判定する」	判定する, 判定する, 見積もる	anordnen
locate 「位置を定める」	位置を定める/定める	rechnen, kalkulieren
place 「場所を定める」	場所を定める/定める	schätzen, auslegen
measure 「測定する」	測定する, 計る, 測る	berechnen, schätzen
put it at 「見積る」	見積る, 見積る	einschätzen, schätzen
make it 「見積る」	見積る, とみなす	(an einem Ort) lokalisieren
take it 「みやす」	みやす, みやす	(auf einen Zeitpunkt) datieren
grade 「等級をつける」	等級をつける	ich messe
rank 「位をつける」	位をつける, 見積る	halten für, ansehen als
rate 「見積る」	見積る, 見積る	anfassen, ansehen als
assess 「評価する」	評価する, 査定する	halten für, glauben
value 「評価する」	評価する, 評価する	einstufen
describe 「記述する」	記述する, 述べる	einordnen
characterize 「特徴づける」	特徴づける, 特徴づける	(auf etw.) schätzen
diagnose 「診断する」	診断する	einschätzen
analyse 「分析する」	分析する, 批判的に検討する	testieren, schätzen
[EXERCITIVES]		
appoint 「任命する」	指名する, 任命する	ernennen, berufen
degrade 「降格する」	降格する, 降格する	erniedrigen
desote 「降格する」	降格する, 降格する	absotzen, degradieren
disown 「免職する」	免職/解職する, 拒否する	zurückstufen, (zurück)ver-
excommunicate 「破門する」	破門する/破門する, 破門出す	setzen
name 「命名する」	命名する, 名づける	entlassen
order 「命令する」	命令する, 命令する	oskommunizieren, ausschließen
command 「命令する」	命令する, 命令する	Raum geben, benennen
direct 「指示する」	指示する, 指示する	befehlen, bestellen
sentence 「判決を下す」	判決を下す, 判決を下す	(fordern)
fine 「罰金を課す」	罰金を課す, 罰金を課す	kommunizieren, befähigen
grant 「許可する」	許可する, 許可する	befehlen
levy 「課税する」	課税する, 課税する	anweisen, sagen
vote for 「賛成投票する」	賛成投票する	(zu etw.) verurteilen
nominate 「指名する」	指名する, 指名する	(mit Dmte usw.) belegen
choose 「選定する」	選定する, 選定する	Strafe auferlegen
claim 「請求する」	請求/要求する	orinholen, zugestehen
give 「授与する」	授与する, 授与する	Steuern usw.) auferlegen
beneath 「過剰する」	過剰する, 過剰する	erheben, einziehen?
parish 「赦免する」	赦免する, 赦免する	(für etw.) bestimmen
resign 「辞職する」	辞職する, 辞職する	für jn. atmen
warn 「警告する」	警告する, 警告する	nominieren, aufstellen
advise 「助言する」	助言する/忠告する	ernennen
plead 「申し立てる」	申し立てる, 懇願する	(jdn. zu etw.) ausrufen
pray 「祈願する」	祈願する, 祈願する	wählen, auswählen, erwählen
entreat 「懇願する」	懇願する, 懇願する	bennapfungen, fordern
beg 「懇願する」	懇願する, 懇願する	verlangen, behaupten

urge 「催促する」	催促する, せき立てる	drängen, dringen in
press 「催促する」	「ほくへしくくだき」 催促する, せき立てる	(in jdn.) drängen
recommend 「推薦する」	推薦する, 勧めを/勧める	drängen, fordern
proclaim 「布告する」	布告する, 宣言する/布告する	empfehlen
announce 「宣言する」	告知する, 知らせる	(den Krieg usw.) erklären
quash 「取り消す」	取消する, 取り消す	verkünden, proklamieren
countermand 「撤回する」	撤回する, 取り消す	bekannt geben
annul 「無効にする」	無効にする, 無効にする	(für etw.) erklären
repeal 「廃止する」	廃止する, 廃止する	an/verkünden, anzeigen
enact 「制定する」	制定する, 法律にする	bekannt geben, Kund geben
repeal 「執行を延期する」	執行を延期する	aufheben, absetzen
veto 「拒否する」	拒否する, いやだと言う	abstatten, (unterdrücken)
dedicate 「献呈する」	献呈する, 捧げる	abstatten, aufheben
declare closed 「終了を宣言する」	「終了を宣言する」	aufheben, zurückweisen
declare open 「開始を宣言する」	開始を宣言する	(Gesetze usw.) erlassen
[COMMISSIVES]		
promise 「約束する」	約束する	versprechen, sein Wort geben
covenant 「誓約する」	必ずしも/必ずしも	sich vertraglich verpflichten
contract 「契約する」	契約する	sich vertraglich verpflichten
undertake 「引き受ける」	引き受ける, 義務を負う	Vertrag abschließen
bind myself 「と誓う」	と誓う	sich verpflichtet über-
give my word 「品質を与える」	品質を与える, 約束する	nehmen
be determined to 「決断する」	決断する, 決断する	sich verpflichten
intend 「意図する」	意図する, 意図する	(sich binden)
declare my intention 「意図を宣言する」	意図を宣言する	sein Wort geben, versprechen
mean to 「つもりである」	つもりである	entschlossen sein zu
plan 「計画する」	計画する, もくろむ	beabsichtigen
purpose 「目的に考える」	目的に考える, しようと思う	seinen Wille erklären
propose to 「提案する」	「～したらどうか」	vorhaben, beabsichtigen
shall 「するであろう」	するであろう	wollen
contemplate 「もくろむ」	もくろむ, 思い描く	beabsichtigen, vorhaben
engage 「もくろむ」	もくろむ, 引き受ける	beabsichtigen
swear 「誓う」	誓う, 誓って言う	versprechen
guarantee 「保証する」	保証する, 引き合う	werden
pledge myself 「誓約する」	誓約する	sollen
bet 「賭ける」	かける	vorhaben, sich ausdenken
vow 「誓う」	誓う, 誓約する	überlegen, erwagen
agree 「賛成する」	賛成する	ins Auge fassen, analysieren
consent 「同意する」	同意する, 承諾する	sich nehmen, verpflichten
dedicate myself 「身を捧げる」	身を捧げる/ゆだねる	unter Vertrag nehmen
declare for 「賛成を宣言する」	賛成を宣言する	auf sich ziehen, engagieren
side with 「加担する」	加担する, くみする/味方する	schweren
adopt 「採用する」	採用する, 取り上げる	garantieren, einstecken für
champion 「擁護する」	擁護する, 護つてあげる	bürgen für
entrust 「交付する」	交付する	geloben, versprechen
espouse 「支持する」	支持する	sich verpflichten
oppose 「反対する」	反対する, 反対だ	wollen
favour 「賛成する」	賛成する, 賛成だ	geloben, schwören
[BEHOLDINGIVES]		
for apologies 「謝意を表明するために」	謝意を表明する	(übernatürlich)
apologize 「謝罪する」	謝罪する	sustinieren,
		der gleichen Meinung sein
		weihen, widmen, sich hingeben
		für bestimmen
		es halten mit jdn.,
		sich auf jn. Seite schlagen
		übernehmen
		einreden für, sich enga-
		gieren für, schützen
		einschließen, umfassen?
		empfangen
		Partial ergreifen für
		unterstützen
		entgegenreten, abhürnen,
		lockupfen, dagegen sein,
		widersprechen
		vorsehen

[illegible][illegible]

affirm	「肯定する」	肯定する、断言する、認める、	beastialism, versichern,
deny	「否定する」	否定する、断言する、認めない、	bestialism, insinuation,
state	「陳述する」	陳述する、断言する、認める、	bestialism, insinuation,
demonstrate	「証明する」	証明する、断言する、認める、	bestialism, insinuation,
claim	「主張する」	主張する、断言する、認める、	bestialism, insinuation,
identify	「特定する」	特定する、断言する、認める、	bestialism, insinuation,
resort	「利用する」	利用する、断言する、認める、	bestialism, insinuation,